

【国語科】豊かに表現する子どもを育む

～自分の考えを明確に書く力の育成～

大阪市内立中大江小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

○本校の課題

H31年度



経年調査の結果から、各学年共通して「書くこと」に課題が見られる。（他の領域と比較して正答率が低く、40～50％台となっている）

R2年度（1年次）



国語科で研究を進めたが、焦点が定まりにくく、研究内容を深めるまでには至らなかった。
そこで、次年度は「書く」領域、作文指導に重点をおいて研究を進めることになった。

R3年度（2年次）



- 「書く」領域での公開授業を実践
- 作文指導の年間指導計画作成
- 時間割に「作文」の時間を週一回設定

R4年度（3年次）



- 「書く」のひと括りから6つのテーマにわけて追及
【題材の設定・情報の収集・内容の検討・構成・考えの形成・推敲】
- 作文指導計画の見直し→実践

R5年度（4年次）

- ブラッシュアップの一年

2. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 国語科の「書く指導」に重点をおいた教育

- 「書けるようになるため」の指導を考える。
- 「言葉の力」をつけるための指導を系統立てる。
- 同領域内での、系統を知る。
- 読んだことを分析して、各学習に反映させる。

視点② 「作文の時間」を時間割に常設し、書くことの定着を図る

- 正しいひらがなや漢字の表記、改行の仕方や会話文「」の使い方、句読点の位置、五感を使っている幅広い表現、擬音語や擬態語の活用、起承転結を意識した構成、書く相手や場面など

の目的意識をもって、作文を書く。

- 教科書の教材で、書く学習をした後、本当にそれらが身についているのか、週一回の学習で、定着を図る。

視点③ 教職員が分担して役目に当たる。

- 児童数が年々増加していると同時に、学級数が増え、教師の数も増加傾向にある中で、効率的に研究部を運営し、役割を明確に分担することで、仕事の内容がわかりやすくなる。
- 作文指導では、最初に年間35回の作文時間の「つけたい力」と「テーマ」をあらかじめ決めてしまう。そうすることで、（今日は何を書かせよう・・・）とか（毎回考えるのが大変だ）という教師の不安をなくす。
- 作文指導の、毎回の添削は、今回の「つけたい力」に沿って作文できているかどうかをチェックするなど焦点化し、教師の添削の負担を軽減させる。

3. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

国語科の研究授業

- 研究授業で実践した内容を、その後の授業にも取り入れ、構成をするときの技術として活用することができた。
- 推敲の手段として提案があった内容を、その後、自クラスでも取り入れた。実際にやってみて、難しさや有効性に気付くことができた。
- 書くためのプロセスを身に着けることで、書くことに意欲的になった。

作文指導

- 文章を書くスピードも速くなり、書くことへの抵抗感も少なくなっていく。
- 年間指導計画があったので、計画通りにできた。
- 「好きだから書く」→「書けるから好き」へと児童の気持ちが移行していった
- 時間割に設定したことで、定期的に取り組める設定がなされていた。
- 校外に作文を送る（参加する）ことで、意欲的に取り組む姿が見られた。
- タブレットを使って入力することも取り入れることで、ローマ字入力の学習にもなった。

（2）今後の課題

- 書くための時間を確保したり、書きたくなるようなテーマを集めたりして、作文に慣れさせてきたことで、書く力はついてきた。4年間の積み重ねは、大きな力になったと感じる。これからは、書くことも話すことと同様、コミュニケーションの一つとして選択されるようになること、そして子どもたちが、自分の願いや思いを綴り続けられるよう、継続できる場所は大いに残していきたい。